

## 28 医資料としての実体標本および

## 模型の保存と活用について

本 宮 かをる

所用でライデン市を訪れる機会があり、博物館で医科学の歴史を辿るうちに日本の状況について思うところがあった。復元された解剖講堂やライデン大学から移管された解剖図や標本の一部などが公開されている「ブルーハーフェ博物館」、数千点の各種医学標本、模型が網羅された「ライデン大学医学部解剖学発生学博物館」、いずれの博物館も三〇〇年を経た標本が良好に保存され、どのように先人が発見を重ねてきたかを想像できる展示で、現代における実体標本や模型の価値、保存と活用についても考えさせられた。そこで本稿では医資料の中でも特に実体標本・模型について触れようと思う。

インターネットで人体の断層映像が提供される今日、実体が不要な場合もあるかもしれないが、触知する観察や拡大しても限りなく情報を得られる点など、教育や研究において実体標本の価値は依然として高い。他方、標本のデー

タベース化、ネットワーク構築により検索で所管場所がわかるようになれば研究教育に活用しやすくなる。最新技術との共存・使い分けにより実体と対面する機会が増すと、博物学時代の標本に骨董・考古以外の価値を見いだすことも可能だろう。ライデン市訪問中に東京大学教養学部大学博物館では、筆者も携わった標本史の展示があり、実体標本や模型の価値を見直す機会をもったつもりであった。

同大医学部標本室は看護学生や研究者たちに医学標本を見学する機会を供している。実体標本は手をいれないと傷むものだが、保存に必要な手だては空間の確保からして充分とはいえない現状である。標本室は行場を失った標本の受入れを余儀なくされているが、管理者の交代などにより廃棄されたり散逸しそうになる例も少なからず目にしてきた。

ライデンの大学博物館で管理が行き届いた標本を眼にしながら過去の上に現在があることを失念しまいとすると姿勢に共感すると同時に、筆者の胸中にはそうした国内の状況が思い出され、過去に向ける眼差しの違いを感じて、今なお彼の地に做う点があろうかと思われた。

一七二一年にライデン大学解剖学教授になったアルビヌスは、見せ物的だった解剖学標本を学術的に変えようとい心

を砕き、朽ちかけた標本を補修し、膨大なリストを作り、展示室を作った。ライデン大学内の「アルビヌスの部屋」で彼の肖像画に直面すると、先代の遺産を観点を変えて再生させるのも、朽ちるにまかせるのも現代の我々次第である、と声がしたようであった。

## 29 山内 一 信

名古屋大学医学部医史料の保管の状況と、保管に対する私共の考えを述べさせていただきます。当部の医学史料は

名古屋大学図書館医学部分館内にある医学部史料室に保管されています。この史料室は昭和六十年に、医学部の卒業生（昭和二十九年卒業を中心）の働きかけにより、それまで史料の内容や位置付けが曖昧のまま取藏されていた医学史料をきちんとした体制で保管しようということで、分館内四階に百平米の敷地をもらい作られました。所蔵品には書籍、報告書、掛軸、医療器具、歴史的絵画などがあり、展示はこれらの原物とパネル等とを組み合わせて、一、年史、論文業績集類書架、二、医学部関連史料展示コーナー、三、医療具等陳列ケース、四、古医書、個人文庫の陳列棚の四

つのコーナーから構成されています。二のコーナーでは尾張や名古屋大学医学部の医学史が一目でわかるようになっていきます。主な所蔵品には「原生要論」（ヨングハンスの医学校最初の出版物）、「医事新報」（明治初期医学雑誌類）、「後藤新平のローレツ送別の辞」、「老烈氏愛知病院手術図」、「北越従軍銃創図録」（英国医官W・ウイリス北越戦争軍陣治療記録）、「本学で開発された胃鏡類」など医学史上、重要なものが少なからず保管されています。また時々同窓生の方や篤志家の方より寄贈品や寄託品もあります。一年中、空調装置により湿度五十パーセント、温度は夏期二十六度前後、冬期十八度前後に調節されています。

ここで医学資料の保管で問題となりますのは、専任の管理者が居ないために十分な管理ができません。そのため最近はドアに鍵をかけ、入管希望者が入室されたときに分館受付で鍵をもらって入室します。また保管管理予算もなく、史料の劣化に対する補修も充分できません。さらに史料そのもののきちんとした把握が十分ではありませんのでデータベースもできていません。

医学史料をきちんと保管するには大学全体としての博物館に相当する施設を建設し、ひとつの分室として、決められた方式で管理することが必要のように思います。ボラン